

## シンポジウム「イメージの〈通路〉」

### パネリスト

遠山 公一 (慶應義塾大学)

樋笠 勝士 (岡山県立大学 特命研究員)

森下 隆 (慶應義塾大学アート・センター)

坂本 泰宏 (信州大学社会基盤研究所、マックス・プランク経験美学研究所)

### 進行・討議モデレーター

後藤 文子 (慶應義塾大学)

### 企画趣旨

1990年代以降、イメージ研究の新たな潮流は、造形芸術作品や音楽作品を視覚的ないし聴覚的な表象として捉える従来のイメージ理解から大きく舵を切り、西洋中心主義的な価値観への反省を深めてきた。それに加え、声高なアピールに陥りかねない文化の多様性・多元性についても吟味かながなされ、現代社会におけるグローバル化の拡大や情報技術の発展に呼応しうる新たな視座が提示されている。社会心理学や神経科学を参照してイメージが切り拓く「力」と「行為遂行性」の地平に注目する美術史家デイヴィッド・フリードバーグの『イメージの力』(1989)、また人類学の観点からイメージの普遍性を説くハンス・ベルティンクの『イメージ人類学』(2001)の成果はよく知られていよう。近年のフランス語圏におけるG. デイディ=ユベルマンや、ドイツ語圏を中心に展開するイメージ学のプロジェクトも、新しい研究の進路を開示している。

21世紀のいま、さまざまな文化圏にまたがり、多領域のメディアに拡張するグローバルな芸術・文化現象をあらためて共有し、イメージの終わりなき可能性を問うことが求められているだろう。イメージは、本来、作品の制作や享受、芸術体験と自己形成、社会的な環境と生活の場をめぐる大切な道程を用意しているはずである。

現代において我々は、イメージにどのような力を託しうるのか。本シンポジウム「イメージの〈通路〉」は、イメージの力がもつ現代的な可能性を感知し、複雑な世界を分かちあう歩みを確かめ、現代の芸術・文化の多面的なアスペクトを浮かび上がらせる試みである。

## 発表要旨

### ◆発表1◆1

デイヴィッド・フリードバーグ著『イメージの力』

遠山 公一 (慶應義塾大学)

イメージは機能を有し、反応を惹起する。人間像は、一瞬でも原型との融合・混同を生じさせる。イメージと身体を混同することは避けることはできない。端的な例は、ポルノグラフィーであろう。第一章の冒頭「人々は絵画や彫刻に性的に刺激される (十二章)。彼らは絵画や彫刻を破壊する (十四章)。彼らは絵画や彫刻を切断し、口づけし、その前で泣き、それらを目指して旅をする (六章)。絵画や彫刻は人々の気持ちを落ち着かせ、興奮させ、反感を起こさせる。人々は絵画や彫刻を通じて感謝し (七章)、自分たちが高められることを期待し、感情移入 (八章) や恐れのもっとも高度な領域へと突き動かされる。」以上、16章からなる同書の内容の一部を紹介した。

対象とするデイヴィッド・フリードバーグ著『イメージの力』は1989年に出版され、すでに古典である。欧米の美学美術史関係、あるいは社会学や文化人類学において、同書は必読文献となっている。その書物は「反応の歴史と理論の研究」という副題をもつ。古今東西を縦横に移動し、数限りないイメージを対象として、アート以前あるいは以後のイメージに対する人々の反応と、それに抵抗する抑圧を分析する。抑圧を起こさせるのは常識や教育、そして芸術概念(アート)であろう。その意味で、同書はアートではなく、イメージを対象とするのである、発表では、宗教イメージの破壊(聖像破壊)とその理論を中心に、同書を検証する。



### ◆発表2◆

フィクション (イメージと言葉) が交叉点となる複数世界

樋笠 勝士 (岡山県立大学 特命研究員)

「フィクション」の概念は、古代哲学においてプラトンがホメロスの作品を「虚偽」と規定して以来、「非現実・非実在」や「物語的文学」を意味したり、仮象的な「芸術」の全体や特定の言語行為を表すなど、多様な位置づけがなされてきた。この史的展開に交叉し結節点となるところに、美学 Aesthetica を創設したバウムガルテンの世界論がある。ライプニッツ=ヴォルフ学派に属する彼は、可能世界論と伝統的な詩学芸術論を基にして、個々の作品について、各々が独自の統一性と真実性をもつ「詩学的フィクション (fictiones poeticae)」であるとして、そこに「世界 (mundus, universum, πάλιν)」或いは「秩序世界 (cosmos)」という概念を与えたのである。個々の作品が各々独自の「世界」である限り、或る作品世界は別の作品世界と混淆することのない自律的な存在性格をもつこととなり、そこから「複数世界」論が現れる。このような理解は、例えば『『マクベス』の世界』という表現で一定の理解或いはイメージをもつ現代の我々とは地続きのものであろう。そし

て、そこには「作品/創造物 (opus/creatura)」の自律性や完結性、内部秩序性といった概念も前提されている必要があるが、これは、古代中世哲学思想にその起源があり、むしろ伝統的な形而上学的立場のものであったこともわかる。このような「複数の作品世界」を考える立場から今回の課題に込めていきたいと思う。



### ◆発表3◆

舞踏家土方巽における病める身体の形姿

森下 隆 (慶應義塾大学アート・センター)

土方巽は1968年に〈肉体の叛乱〉を踊り、肉体が暴力とセクシュアリティの根源であることを過激な踊りで顕にした。土方巽は1960年代を通して、独自の身体表現を展開し、前衛美術家との協働や有数の文化人の支援を受けての芸術運動をもって「舞踏」を成立させていたが、この〈肉体の叛乱〉をもって、土方巽自身が「肉体」をキーワードに時代の寵児となった。

土方巽は以後4年間にわたって舞踏の舞台に立つことはなかったが、この間に、第2次舞踏宣言というべき「犬の静脈に嫉妬することから」という奇妙なタイトルのエッセイを発表する。キーワードは身体の「不具」である。そして、三島由紀夫の「死」に直面するとともに、三島の遺作により「肉体こそ不治の病」の言葉を突きつけられる。

三島の死から2年後、ついに〈疱瘡譚〉で土方巽は舞踏の舞台に復帰する。この作品のキーワードは、タイトルにも示されているように「病」である。〈肉体の叛乱〉では舞台上に肉体が屹立したが、〈疱瘡譚〉では文字通り立てない肉体となった。

本発表では、土方巽が絶えず自らをも裏切る舞踏表現を創出し、ついには「病」を踊ることで、世界のダンスの概念を転倒させたことを確認する。そして、この〈疱瘡譚〉の、とりわけフランシス・ベーコンにインスパイヤーされ、「ライ病者の踊り」とされたシーンを参照しつつ、土方巽はなぜ「病」を踊ったのか、どのように「病」を踊ったのかをあらためて検証する。



### ◆発表4◆

イメージ空間における意識と像行為 (Bildakt) の所在

坂本 泰宏 (信州大学社会基盤研究所、マックス・プランク経験美学研究所)

ウフィッツィ美術館は2014年に館内撮影を解禁した。これにより、決して少なくない訪問者たちにとって、現地でイメージを見る行為は、絵画と向き合うという体験ではなく、絵画たちと共に記録される通過儀礼となり、展示空間の絵画の前には不可侵領域として不自然な隙間が出現した。継承されるイメージたちと比較すれば遥かに短命である自己存在をイメージの側に記録させる行為を取り巻く現象は、ネオ・マネリスムにおける像行為の所在と射程をより精緻なものとするべきこと

を迫っている。

ベンヤミンはパサーージュ論「K」のなかで19世紀の夢想を論じたが、ネオ・マニエリスムのパサーージュを含むイメージ空間において集団的意識を主体的に形象するのは寧ろひとではなく、そこに堆積し、像行為の共鳴からイメージ知とその作用を強調するイメージ群であると考えすることはできないだろうか。その根拠に、ひとは、パサーージュの一部として集団的意識に沈潜するどころか、寧ろその図式のなかにあっても、場に内在するアウラに寄り添う形で自己を複製し、それを俯瞰的に眺め（させ）ることよりエゴを拡張し、存在を一層強く保ち続けている。

本論では、この問題について、フラマリオン木版画やベラスケス作『ラス・メニーナス』に形象されたイメージ空間におけるひとの複眼的世界観を再認識し、その上で、ヴァチカン美術館『地図の間』やフリーダー・ブルダ美術館の企画展“Transformers”などを事例に議論を進める。